

シリア文化遺産保全のための国際ネットワーク shirin について

西秋 良宏

Activities of the shirin — Syrian Heritage in Danger: an International Research Initiative and Network

Yoshihiro NISHIAKI

キーワード：シリア考古学、文化遺産保護、国際協力

Key-words: archaeology of Syria, safeguarding of cultural heritage, international cooperation

2011年の春に始まったシリアの政情不安。それがシリア国および関連諸国に与えた強烈な影響についてはさかんに報じられているところであるが、それには文化財、考古学研究への影響も含まれる。シリアは数十年の間、西アジア地域では有数の政権安定国であり続け考古学研究の中心地の一つでもあったから、今期の不安で中止を余儀なくされた現地調査隊の数は100を超えている。情勢が終息する気配をみせない中、関係する考古学関係者の対応は様々である。これまで実施した調査の出版に専念する、別の国に調査地域を求める等々、方策もあろうが、現地渡航がかなわないことには進展しない事業が多々あることは明らかである。さらに懸念すべきは、遺跡の破壊や盗掘等、文化財、すなわち考古学の研究対象そのものの消失が進んでいることである。

この憂うべき状況について、これまでシリアで現地調査を実施してきた各国研究者が意見交換しつつ、対応する組織を作ってはどうか。2014年5月、第9回国際古代西アジア考古学会議 (International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East: ICAANE) において、そうした決議がなされた。それにしたがって、シーリーン (shirin) というシリア文化財をめぐる国際ネットワークが発足した。紛争発生時ないし近い過去においてシリアで考古学的な活動をしていた世界17ヶ国から各国一人ずつ研究者が委員として加わって構成するものである。筆者は日本の委員として関わることとなったので、組織の概要について簡単に報告しておきたい。

「シーリーン」を正確に述べれば、シリア文化遺産 (遺跡、建造物、博物館) の保護・保全のための国際的研究者連合といったところである。発起人代表をヨーロッパ・メ

ソポタミア研究所所長、M. ルボウ (Lebeau) として、ベルギーで国際NPO法人として登記された。その後、設立総会 (後述) にてF. ブレメール (Braemer)、A. ジェイミーソン (Jamieson)、H. キューネ (Kühne)、G. フィリップ (Philip) の4名が執行部として選出され、輪番で代表を務めることになった。第一期はブレメールが会長、キューネが副会長、フィリップが会計、ジェイミーソンが事務局を担当する。

設立の経緯や目的は、趣意書のとおりである (図1)。要するに、このネットワークは、シリア文化遺産の保護、保全、復旧にあたって協力すること、そして現地で活動する文化財担当者を援助することを主たる目的としている。外国人集団による援助押しつけというのではなく、現地のみなさんの要請に応えるための組織であることが述べられている。また、設立されたのはいわゆるイスラム国問題が勃発する以前ではあるが、現地からの要請に対応するにあたっては、その政治的立場を考慮しないことも明言されている。

現在までの活動は、主として三つある。第一は、シリアの遺跡データベース化。どのような遺跡がシリアにあり、保護の対象とすべきなのか。シリアの古物博物館局 (DGAM) がまとめているとはいえ、最も詳細なデータを持っているのは実際に諸遺跡の調査を主導していた各国の調査隊である。どの遺跡については誰に問い合わせればいいのか、そういったリストの再整備がねらいと言ってよい。当面、1980年以降に発掘された遺跡についてデータベース化された。日本の場合、シリアの現地調査は主たる5機関ないしグループによって実施・承継されてきた (図2)。データベース化の作業にあたっては、赤澤威、石田恵



■ 趣意書

シーリーン (shirin) は西アジアの考古学、美術史、古代史に携わる研究者で構成する国際的な発起人会である。その専門的知識をシリアにおける様々な文化遺産保護活動に活用すべく、2010年まで現地調査を続けてきた各国の主要な調査団が集まって結成したものである。長く各国の調査隊をひきいてきた代表者、そしてシリア文化遺産の保護について熱心に取り組んできた多くの専門家を含めて委員会を構成した。

シーリーンの委員会は2014年6月10日、スイスのバーゼルで開催された第9回国際古代西アジア考古学会議において、参加者からの要請もとづいて組織された。シリアでおこなわれてきた数々の考古学、歴史学調査団を代表する委員会として、近隣諸国で活動してきた研究者たちからも承認を得た。

シーリーンはヨーロッパ、北米、オセアニア、東アジアの代表的な機関、大学、研究所に基盤をおき、シリアの文化遺産(遺跡、史跡、博物館)を保護、保全しようとする公的、私的団体の活動を支援することを主たる目的とする。シリアの研究者、諸機関からの要請を、それがどのような政治的、宗教的、民族的背景を持っていたにせよ、吟味し対応していく。特に緊急を要する措置、施策については優先的に対応するものとする。

委員はそれぞれの研究分野についての深い専門的知識を有し、また、総合すればシリア全域を視野に入れうる構成となっている。このことを活かし、各地のネットワークを働かせ、遺跡管理人の給与支払い、調査隊基地、発掘品・資材の保護などを可能な限り支援していく所存である。また、シーリーンは多くの公的、私的団体と連携しつつ、現今の紛争にもなる被害情報を収集し、緊急の修復や保護が必要な案件を同定することもおこなう予定である。

シーリーンは協力してシリア文化遺産の包括的データベース作成にも取り組んでいく。データベースは、遺産に被害があった場合、一つ一つ、実態を記録していくための基本台帳となるだけでなく、紛争に起因する被害の全体的な傾向、程度を評価することにも役立つはずである。そのため、シリア全域を網羅し、かつ様々な種類の遺跡、史跡を対象とするものにする。それは、現地で遺産保護に取り組んでいる人たちににとって必須の情報源となり得る。遺産保護においてどこを優先すべきか判断するにはそのような知見が根拠となるからである。

シーリーンには建築や遺物の修復について長くかつ深い経験をもつ専門家、そして歴史・先史のあらゆる時代の専門家が属している。また、世界各国の研究チームをもって組織することができたので、上に述べた目標は十分に達成できるものと考ええる。そして、被害を防止したり記録したりする段階から遺産を修復、復元する段階へと移行した際には、現地の当局者、地元社会を支援しようとする準備ができると考える次第である。

2014年7月

■ 構成と担当*

発起人代表: M. ルボウ (M. Lebeau, ベルギー) 前期青銅器時代・建築修復

顧問: C. ダニング・シエルシュタイン (C. Dunning Thierstein, スイス) 渉外担当

M. アル＝マクディシ (M. al-Maqdissi, シリア) 青銅器時代・鉄器時代

S. アル＝クンタール (S. al-Quntar, シリア) 後期銅器時代・前期青銅器時代

委員: P.M.M.G. アッカーマンズ (P.M.M.G. Akkermans, オランダ) 新石器時代・前期銅器時代

L. バドル (L. Badre, レバノン) 後期青銅器時代・鉄器時代・博物館運営

F. ブレメール (F. Braemer, フランス) 青銅器時代・鉄器時代

J. エイデム (J. Eidem, デンマーク) 中後期青銅器時代

M. フォルタン (M. Fortin, カナダ) 青銅器時代

M. ガウリコフスキ (M. Gawlikowski, ポーランド) 古典時代・ビザンツ時代・博物館運営

D. ジェネカン (D. Genequand, スイス) イスラム時代

A. ジェイミーソン (A. Jamieson, オーストラリア) 前期青銅器時代

H. キューネ (H. Kühne, ドイツ) 前期青銅器時代・鉄器時代・建築修復・博物館運営

M. モリスト (M. Molist, スペイン) 新石器時代・前期銅器時代

西秋 良宏 (日本) 旧石器時代・新石器時代・前期銅器時代

G. フィリップ (G. Philip, イギリス) 後期銅器時代・青銅器時代

A. シュミット＝コリネ (A. Schmidt-Colinet, オーストリア) 古典時代

G. スタイン (G. Stein, アメリカ) 新石器時代・銅器時代

C. トンギーニ (C. Tonghini, イタリア) イスラム時代・博物館運営

*構成は適宜、変更がありうる。ここには発足時のものを掲げた。最新版はホームページを参照されたい。

図1 shirinの発起人文書

難民の受け入れは各国の政策にしたがう問題であるからナーバスである。シリア人学生の受け入れをすすめるべきとの意見もあるが、これも各大学で定められたアドミッション・ポリシーに照らすべきことであって、慎重な議論が尽くされるべきであろう。しかし、博士研究員であれば柔軟な対応が可能であって、研究者ならではの提案と思われた。

以上のように、シーリーンは現在のところ、全員で何かを実施する母体と言うよりは個々に動いているプロジェクトの情報を集約するプラットフォームといった具合である。そして、それは効果的に機能しているように見える。日本西アジア考古学会をはじめ、各国で進められているシリア文化財支援活動にどのようなものがあるかを調べたり、自らの活動を伝えたり、さらには、連携できることを検討するなど多様な活用の仕方がありうるだろう。また、

連携次第では、将来的に（最も望ましいのはこのような組織が早く不要となることではあるが…）、独自の支援策の実践も可能になると思われる。

シーリーンは会員（個人、機関）のおさめる会費、寄付などをもとに、財政的にはきわめてささやかに運営されている。入会、寄付の申込みは随時受け付けている。また、ボランティアや情報提供も募集している。詳細はホームページを参照いただきたい (<http://shirin-international.org/>)。

参考文献

西秋良宏 2014「シリアの歴史と日本人による考古学遺跡調査」東京文化財研究所文化遺産国際協力センター（編）『シリア復興と文化遺産』25-29頁 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター。

西秋良宏

東京大学総合研究博物館

Yoshihiro NISHIAKI

The University Museum, The University of Tokyo